少年消防クラブ
活動事例

北海道北見市太陽わらべ太鼓少年消防クラブ

「向こう三軒両隣」普段の交流が災害時の減災につながると信じて

顧問　山内　克也

1　私達の地域

私達の住む北見市はオホーツク海東部に面し、北海道の中央にそびえる大雪山を横断する石北峠の頂上からオホーツク海までの約110キロの距離と広い面積を活動地域としておりその広さは東京都の面積とほぼ同じ広さになり、気候は冬期間、氷点下25度まで下がり厳寒で夏は35度近くまで上がる温度差の激しい地域です。主な農作物は玉葱やジャガイモ・米、海産物はホタテ・鮭などです。

2　クラブの結成

私達地域の消防クラブの結成は昭和55年7月に少年消防クラブと婦人防火クラブの結成から始まり、昭和62年に幼年消防クラブが結成されました。

平成2年に幼年・少年・婦人防火クラブの3つのクラブを統合し北見地区幼年少年婦人防火委員会として新たに歩みだし、現在は幼年39団体・少年3団体・婦人9団体の総勢5,319名の方々が各地域や施設で防火・防災活動に取り組んでいます。

しかし、近年の少子化や過疎化により小規模へき地校を中心に結成していた少年消防クラブが閉校の為に減少し、なかなか少年消防クラブ員を増やすのが難しい状況で苦慮していたところ、少年消防クラブ員の構成年齢が小中学生から高校生まで引き上げられたのを期に他の活動団体に消防クラブの活動を取り入れて頂き、少しでも防火意識の高揚・普及につながればと考えました。

幸いにも保育園で幼年消防クラブを経験した子どもや親達で結成されている「太陽わらべ太鼓保存会」に相談したところ、「郷土を愛し地域の伝統文化を創生し後世に残す」などの共通の目標等が多くあり且つ主たる構成年齢が高校生までと合致。保護者の賛同も得られ平成22年11月に結成の運びとなりました。

3　活動状況

クラブの活動は、小学校高学年・中学生を中心に毎週一回、金曜日の太鼓練習前に規律訓練や結索訓練等を行いながら和太鼓の活動の中に防火・防災学習を組み込み、継続性を持った指導を行っております。

その姿を見て育つ後輩たちには先輩たちの姿や活動服が憧れとなって居るようです。

毎年7月に開催される防災フェスティバルでの軽可搬ポンプ操法の訓練・披露や夏休み

防災フェスティバルでの和太鼓演奏

山内会長と記念撮影

軽可搬ポンプ操法

規律訓練

ロープ結索訓練

幼年少年婦人防火大会での和太鼓演奏

に開催される少年消防クラブ一泊学習会への参加。３年に一度開催の幼年少年婦人防火大会への参加や歳末火災特別警戒での啓発活動など、時には和太鼓演奏をまじえて市民の皆様に火の用心を訴えています。

4　全国交流大会に参加して

第１回全国交流大会へも参加しました。入賞こそ逃しましたが子ども達にとって忘れる事の出来無い良き思い出と自信に繋がりました。参加の目的は競技としてではなくあくまでも訓練の一環として取り組むことを第一に掲げ、競技中の行動はきびきびと美しく、移動は隊列を組んで駆け足で、声は大きく、操作は正しく正確に等が目的でした。それでもやはり結果発表後は入賞出来無かった悔しさに皆、待機所で涙を流していました。でもこの涙は次の大会へ向けた大きな意欲ともなったようです。

5　命を守る訓練

毎年、訓練開始時に子ども達に話す言葉として「この訓練は命を守る訓練であり遊びではない。決して楽しく面白いものばかりでは無い。」と釘を刺し、特別な活動である事を自覚させています。その為に返事や伝達、会話は大きな声でハッキリ正確にしなければならない事を知らせ指導は始まります。現代の子ども達の中には大きな声が出せない、自分の意見を言わない子ども達が増えています。

その中で少年消防クラブの訓練・活動を通して、少しずつではありますが自分の意見を大きな声で発表出来る様になって行く姿は、指導している者として大きな喜びの一つでもあります。

6　対岸の火事

私達の住む地域は昔から大きな自然災害もなく住みやすい街として過ごして来ました。しかしこの安易な意識が、「危機意識の低い無防備な環境を作り上げている」と言っても過言ではありません。日本各地で起きている自然災害をテレビや報道で目にしますが、対岸の火事を見るが如く私達の地域では起きる訳がないと高を括って備えをしない人が多いのが現状です。

クラブの子ども達には日頃、各地で起きている災害の大きさが実感出来る様に被害の大きさや怖さを身近な物に例えて話し、自分たちで出来る事や対応について意見を聞き、皆で話し合うようにしています。

7　今後の子ども達に望むもの

地域が広大なゆえに即応性が求められる災害が発生した時に自分は何をしなければならないのかを判断出来る子。これから更に色々な知識や技能を身につけ自分の身は自分で守れる子。そしてその知識や技術を活かし、将来の地域防災の要になる大人へと成長してくれる事を願っています。

北海道札幌市西町少年消防クラブ

指導部長　屋木　妙子

西町少年消防クラブは、平成元年５月27日に結成した29年目を迎えるクラブです。

活動拠点である西町・西野・宮の沢地区は、札幌市西区の中央部に位置しています。明治５年に仙台白石藩の人たちが入植した145年の歴史と開拓精神の息づく町で、クラブ員が通う小中学校もその当時に開校しています。また、Ｊリーグ北海道コンサドーレ札幌の練習グラウンドがあり、地域にスポーツが密着した子供たちの成長には理想的な土地柄です。

当クラブは「楽しく火災予防を学びましょう」を合言葉に、中学生６名、小学生24名、幼稚園児２名の32名のクラブ員が活動しています。特に中学生クラブ員は準指導者と位置づけており、より高い知識技術を得ながら、小学生を見守るよき先輩としてクラブ活動しています。また、指導には消防団員とクラブ員のお母さん、クラブＯＢの地域の12名があたり、実践的な防火防災教育とクラブの地域での伝統をつないでいます。

クラブの年間活動は、４月のクラブ員の募集に始まり、６月の入団式でのクラブ員の顔合わせをし、リーダー、サブリーダーを決定します。毎年入団記念に消防署、出張所の庁舎前プランターに花を植えて飾ります。

８月は設立以来続けている一泊研修を行います。この研修では消火器の取扱い、放水訓練、心肺蘇生法といった消防活動を学ぶと共に、地区会館を借りて寝袋での宿泊、指導者や保護者と共に食事を作るなどの避難生活の模擬体験を行います。宿泊体験を通じて、仲間や地域の大切さ、防災知識の必要性を学んでいきます。

夏休みには、クラブ活動のＰＲとクラブ員としての自覚を持たせることを目的に、連合

一泊研修会で心肺蘇生法の研修

入団記念に消防署前に花を植える

区内の５少年消防クラブ合同研修

消火栓の除雪作業

町内会の夏祭りに心肺蘇生法体験する出店を出して、クラブ員から地域住民へＡＥＤ取り扱いを指導しています。秋から年末には防火パトロールと大型商業施設での防火の呼びかけを行い、冬の札幌では地上式の消火栓さえも雪の下に埋まってしまうので、消防団員と協力して消火栓の除雪を行っています。

３月、６年生は小学校卒業に合わせてクラブから巣立っていきますが、毎年何名かは４月から中学生クラブ員としてさらに活動を続けていきます。

西区内には５つ少年消防クラブで運営している西区少年消防クラブ協議会があります。

夏には地域の大人たち（防災リーダー）と合同での研修会が開催され、札幌市消防学校の学生達から訓練指導を受け、防災リーダーの前でロープ結索や規律訓練を披露しました。

出初式でＡＥＤの取扱いを披露

また、今年度からは、防火・防災の知識や技術を評価することによりクラブ員に「やる気」と「やり甲斐」を持たせることを目的とした「消防マイスター検定」を実施しています。

学年毎に与えられた課題をクリアーすると認定バッチを交付され、バッチをもらって喜ぶ顔の中にクラブ員としての自覚と誇りが芽生えているのが感じられました。

今後は、少子高齢化に伴うクラブ員の減少や指導者の高齢化といったクラブの存続に関わる課題があります。また、私たちの地域は地震、崖崩れ、水害といった大きな災害に襲われた経験がなく、災害への危機感や防災の意識づけが育ちにくいといった課題もあります。

これらは容易に解消できるものではありませんが、将来クラブ員たちは、地域だけではなく、北海道外、あるいは海外でも生活する機会が出てくると思います。それぞれが生活する地域で防火防災活動に関わり、自分自身や家族、地域を守ることができる大人になれるように、あと押しを続けることが私たちの責任だと考えて、活動を続けていきます。

西区消防クラブの合同卒団式

岩手県葛巻町小屋瀬少年消防クラブ

育成会事務局　中山　優彦

岩手県葛巻町の小屋瀬少年消防クラブです。我が少年消防クラブは、昭和57年5月に結成され以来30年間という長きに渡り活動を続け現在に至っています。

実は私たち少年団の歴史はもっと深く、昭和52年6月に森林愛護少年団として発足し、「町の防災は幼少の頃から身につけるもの」との信念から結成に至ったと聞いています。実はもう1つおまけに防犯少年隊も兼ねており、3つのクラブで多彩な活動を体験しています。

平成22年にはモデル少年消防クラブの称号をいただき、新調いただいた鮮やかなオレンジ色の活動服で、子供達は意気揚々と明るく活動をしています。

近年、町の防災計画が見直され、行政と地域の自治会との連携による全町民参加型の総合防災訓練への参加も実現し、消防団の皆さんにも引けを取らない威風堂々たる活動を展開しています。防災訓練では、一日消防団長や一日消防分署長などの大役も努める機会をいただきますが、我も我もと積極的な子供達の人選に頭を悩めております。将来を担う消防団のごとく、整列における敬礼姿は心を打たれるものがあります。私たち指導者は、かつての少年消防クラブを体験した一員が主に集まり活動の指導をしておりますが、学校の先生でもない、普段つきあうこともない大人達との交流も少し楽しんでくれているのではと勝手に自負しているしだいです。時には、学校の行事と重複したり、続けざまに活動が組まれたりと、子供達には負担を掛けること

葛巻地区森林愛護団／小屋瀬防犯少年隊 / 小屋瀬少年消防クラブの3つの組織を兼ねる

一日消防団長、一日消防分署長の大役を務める

ポンプ操法を披露

レスキュー隊になった気分

パトカーの乗車体験

地元消防団と火防点検

もありますが、子供達は何処吹く風、屈託のない子供達の姿に慰められ頭が下がります。

私たち少年団のモットーは、地元学校のスローガンである「たくましく生きる小屋瀬の子」です。資金面では苦慮することもありますが、何処に行くにも小遣いを持つことは禁物です。みんなで同じ活動をして同じ食事をする。困ったときには助け合い知恵を出し、お互いをいたわりながら、みんなで明るく楽しく活動するのが、小屋瀬少年消防クラブです。これからも力を合わせ地域のために取り組んでいきたいと思います。応援よろしくお願いします。

小屋瀬少年年消防クラブ員

宮城県気仙沼市立階上（はしかみ）中学校少年消防クラブ

階上中学校 校長　小山　弘基

1　階上（はしかみ）中学校少年消防クラブ

本校は、平成 17 年度から気仙沼市危機管理課、気仙沼市消防本部の指導の下、防災学習の授業として“総合的な学習の時間”において年間 35 時間のカリキュラムを作成し、３年かけて「自助」・「共助」・「公助」について学習しています。少年消防クラブには、それと同時期に全校生徒で加入しています。

2　東日本大震災を経験して

発災直後、海抜 31 メートルの高台にある本校及び体育館には、多くの避難者が押し寄せてきました。当初、職員と地域の有志で校庭の駐車スペースの割当てや、体育館避難所の設営など少人数で対応していたところに、本校出身の高校生が駆け付け、支援物資の搬入や炊き出しへの協力など、献身的な取り組みをしてくれました。中学生もそれをまねして活動していた姿は、正に、これまでの取組の成果であると感じています。

一方、当地域における津波被害の犠牲者が気仙沼市で一番多かったのも事実です。学校でいくら防災学習を行っても地域にまで浸透していなかったのです。考えてみれば、子どもたちが学校にいる時間は１日のうちの３分の１程度であり、家庭や地域で過ごす時間が多いことから、地域防災についても考える必要が出てきました。

3　階上地区防災教育推進委員会の設立

平成 24 年に当時の校長と自治会長との話し合いで、地域防災の強化を目的として設立しました。今年度も、地区内保育所や小中学校、振興協議会、公的機関、各地区自治会等が参加し、約 40 名で活動しています。内容としては年３回の会議と 11 月上旬に実施する総合防災訓練における地区内の取組の確認です。総合防災訓練の日は休日ですが、学校は授業日に振り替えています。午前中は家族とともに地区毎の一次避難所へ避難し、避難者リスト作成や小学生のお世話など、中学生としての役割を行います。平成 28 年度からは各自治会で新たな試みも始まり、地域コミュニティーの活性化及び災害時の対応確認等

炊き出しをする卒業生

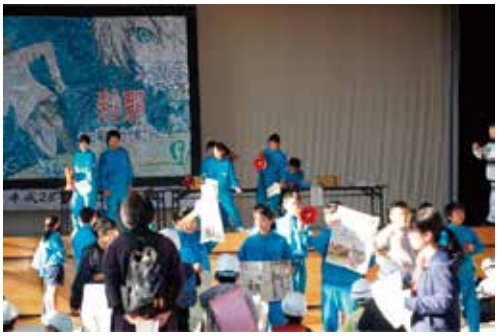
階上地区防災教育推進委員会の様子

を目的として防災運動会を開催する自治会も出てきました。午後は階上中学校体育館で中学生による避難所設営訓練を実施します。小学６年生と中学生は設営側に、それ以外の小学生は避難者として、階上地区防災教育推進委員にはその様子を見学していただき、アドバイスをお願いしています。

避難所における中学生の役割

４　少年消防クラブの活動が学力向上に寄与

少年消防クラブの活動としては、規律訓練やバケツリレーによる初期消火訓練を行っています。特に規律訓練では、礼儀作法や集団行動だけではなく、授業中の集中力や取り組む態度に好影響を及ぼし、学力向上にも一役を担っていると感じています。平成 28 年の８月には、代表生徒６名が宮城県南三陸町で行われた全国少年消防クラブ交流会に参加し、本校の防災学習の取組について発表してきました。



避難所設営訓練の様子

５　未来の防災戦士として

平成 26 年２月、下校途中に本校女子中学生４人が民家の小火を発見し、一人は消防署に通報、残る３人は近隣住民に呼びかけ、バケツリレーで消火作業を行った結果、大事にいたらなかったというようなことがありました。その女子生徒たちは、新聞記者の取材に対して「学習したことを実践しただけです。」と答えましたが、“知る”“備える”“行動する”を軸とした実践的な防災学習の成果であると思います。また、平成 26 年の６月には、本校防災学習を学んだ１期生男女３人が地元の消防団に入隊し、ニュースになりました。本校で防災学習を学んだ生徒は、『未来の防災戦士』として、自分の身を災害から守り、「救助される人」から「救助する人」として、将来、自分の置かれた立場で地域貢献してくれるものと信じてやみません。

卒業生が地元消防団へ入団

宮城県南三陸町立歌津中学校少年消防クラブ

災害において地域を担う人材育成

南三陸町立歌津中学校 教諭　及川　敦

1　「歌津中少年防災クラブ」の結成

「歌津中少年防災クラブ」は震災前にその結成が検討され、４月にスタートを予定していました。しかし、東日本大震災が起こり、その発足が危ぶまれました。

震災の際、歌津中学校体育館には約800人が避難し、その年の８月11日まで本校での避難生活が続きました。生徒たちはその間、自分たちにできることを行いました。しかし、もっといろいろなことを手伝いたい、みんなのために、地域のためにもっともっと多くのことに取り組みたい、役立ちたいという思いをもって避難所生活を送っていました。そういう生徒の思いが、震災後に改めて「歌津中少年防災クラブ」を発足させようという力になったことは確かであると思います。全校生徒で組織し、本校の防災教育の取組のすべてが少年防災クラブの活動として位置付けられています。また、２・３年生の代表者で構成される少年防災クラブ「代表委員」の活動として、他校や地域との交流、また通常点検訓練や軽可搬ポンプ操法訓練などの代表委員訓練を行っています。

代表委員による通常点検訓練の発表

2　「歌津中学校区防災教育協力者会議」

平成24年５月、歌津中学校の防災教育の支援と、さらに将来的には歌津中学校区の小中学校の防災教育を推進することをねらいとして発足しました。今年度は24名で構成し、年２回の会議を開催します。

教職員が転勤をし、人が入れ替わっても地域の方々や消防署、また町教育委員会等のメンバーで構成される本会議は、継続して歌津中学校区の防災教育に携わっていただくことができるものと思います。

歌津中学校区防災教育協力者会議の様子

3　生徒が主体となる「避難所運営訓練」

１学期、規律訓練から始まる各種訓練を統合したものとして位置付けるもので、防災に関するスキルを実際の災害に近い状況の中で、使わざるを得ない設定の中で本当に使うことができるかどうかを訓練します。

生徒が40歳、50歳の大人になったとき、再び大きな津波が襲ったとする設定で実施します。ほとんどの教職員は避難民として参加し、生徒の安全面に関すること以外は口出ししません。避難所の開設から救護所の運営、

避難所運営訓練　朝の登校風景

水の確保に昼食の炊き出し、消火訓練にけが人等の手当など、適切な判断力が求められます。生徒たちは状況を把握し、考え、判断して行動します。もちろん失敗もありますが、それも大切な体験です。

訓練　火災発生！バケツリレーで消火

4　更なる発展を目指して

平成 26 年度から防災教育の年間計画を再構築し、全校で実施する体験的な活動に加え、学年ごとの学習を設定しました。１年生は「地域を知ろう」２年生は「地域について学ぼう」３年生は「防災・減災について調べよう」という学年テーマに基づいた学習です。

これまでの防災教育を継続するとともに、より発展させていきたいという生徒・教職員の思いです。本校の防災教育は着実に“伝統”になりつつあります。伝統をしっかり受け継ぎ、持続させ、より発展させることができる活動に高めていきたいと思います。

１年生「地域安全マップづくり」危険箇所調べの活動

5　「地域」とともに

本校の防災教育は多くの地域の方々の協力と支援で成り立っています。生徒たちはそのことを理解し、また東日本大震災の経験から地域に貢献したいという思いをもっています。その思いを生かし、地域の中で自らの役割を自覚し、責任をもって果たすという姿勢を育てていくことが本校防災教育の一つのねらいです。

生徒たちは、将来、どこで生活することになるかわかりません。しかし、沿岸部・内陸部・都市部等どこで生活することになっても、災害が起こったときは、まず自分の命を守ることを第一とし、それぞれの生活する地域の一員としての責任をしっかり果たしてほしいと願っています。

南三陸町防災訓練に参加した少年クラブ

埼玉県三郷市少年消防クラブ

地域防災を担う人材育成の取組　～先輩から後輩へとタスキを繋げる～

三郷市消防本部　五十嵐　敦

1　三郷市の特徴

三郷市は、人口13万９千人、埼玉県の南東端に位置し、東京都、千葉県と隣接し、東京都心から15km～24kmの距離にあり、首都高速・常磐高速道路・東京外郭環状道路を繋ぐ三郷ジャンクションやＪＲ武蔵野線、つくばエクスプレス線により都心へのアクセスも良く、人口が増加しています。また、ＪＲ武蔵野線新三郷駅周辺には、ららぽーと新三郷、ＩＫＥＡ、コストコ等の大型ショッピングセンターの商業施設が建ち並び、県内外から多くの人が訪れ賑わっています。

2　三郷市少年消防クラブ

三郷市少年消防クラブは、平成23年４月１日に「クラブ活動を通じて消防・防災について学習し、正しい知識と技術を修得し、生命(いのち)と暮らしを守ることの大切さを学ぶとともに、規律や防火マナー等を身につける消防防災教育を行い、クラブ員を通じて家庭及び地域の防火・防災意識の高揚を図り、将来の地域防災の担い手となる人材育成を目的」に市内小学５・６年生、32名で発足しました。

平成28年度は、小学５年生から高校２年生まで98名が在籍し、「時には厳しく、時には楽しく」消防・防災について学んでいます。

3　三郷市少年消防クラブ活動

当クラブでは、年間行事に基づき活動を行っております。小学生クラブ員は基礎を学び、中学生クラブ員はリーダーシップを執り、活動に励み、高校生クラブ員は応急手当普及員の資格を取得し、準指導者として指導者とともに後輩クラブ員たちの指導に当たっています。

平成24年度からは、年間行事の他に有志クラブ員による軽可搬ポンプ操法を取り入れ、三郷市消防団消防操法大会や市総合防災訓練などに軽可搬ポンプ操法を披露しています。軽可搬ポンプ操法に携わったクラブ員たちは後輩たちへ積極的に指導し、手本となっています。

クラブ活動の消防体験学習（３デイズ）は、３日間をとおして消防防災について学ぶ

規律を指導する準指導員

市総合防災訓練で指導（高校生クラブ員）

軽可搬ポンプ操法の披露

消防体験学習での高所からの降下訓練

訓練が人気で、訓練礼式から始まりロープ結索、軽可搬ポンプを使った放水体験など様々な体験学習を行っています。その中でも救助体験が特に人気で、降下訓練・渡過訓練では何度もチャレンジするクラブ員が多くいます。

市の総合防災訓練では、自主防災組織の方々と協力し傷病者搬送訓練、水消火器を使用した初期消火訓練や水バケツリレーを一緒に行いました。また、自主防災組織の人と一緒に消火器体験コーナーを担当し参加者への訓練指導を行いました。

4　少年消防クラブ交流会（全国大会）

平成 27 年度徳島県で開催された「少年消防クラブ全国交流会」消防競技において優勝することができました。翌年の宮城県で行われた大会では、大会２連覇を目指して臨みましたが、0.9 秒差で２位となり悔し涙を流しましたがよい経験となり、一緒に練習をしてきた仲間との絆とそして大会に参加したクラブ員と親睦を深めることができました。

5　活動が認められ

当クラブは発足から５年が過ぎ、平成 25 年度に東京ドームで開催された「消防団 120 年・自治体消防 65 周年記念大会」で全国の少年消防クラブ員とともに放水訓練を披露し、平成 26 年度に開催された「消防団を中核とした地域防災力充実強化大会」では、活動報告及び軽可搬ポンプ操法を披露しました。これら日頃の活動が認められ、平成 26 年優良少年消防クラブ・指導者表彰において優良な少年消防クラブ（消防庁長官表彰）を受賞することが出来ました。

平成 27 年度は「ヨーロッパ青少年消防オリンピック」にクラブ員５名を派遣し貴重な体験をすることができました。

6　今後の展望

地域防災の担い手となる人材を育成するには、各団体や組織が一体になって取り組む必要があります。関係機関と協力してクラブ員を育成していき、三郷市少年消防クラブ員たちが近い将来、消防団や防災組織などに積極的に関わってくれることを願っています。

ヨーロッパ青少年消防オリンピック派遣

埼玉県吉川松伏少年消防クラブ

守ろう自分を！守ろう大切な人を！守ろう大切な郷土（まち）を!!

吉川松伏消防組合消防本部　清水　万里

1　はじめに

吉川松伏少年消防クラブは、埼玉県の吉川市と松伏町にて構成された消防機関である「吉川松伏消防組合」により運営されております。

ここで、少し構成市町の紹介を・・・

まず、吉川市は西に中川、東に江戸川と２つの川に挟まれた地形を生かした文化が育まれ、なまずなどの川魚料理が有名です。都市化が進んだ現在でも、昔ながらの四季風景があちこちに見られます。

そして、松伏町は都心から 30 キロ圏内に位置しながらも、のどかな田園風景が広がり、緑豊かな自然が多く子育てには最適な町です。

2　吉川松伏少年消防クラブの発足

吉川松伏少年消防クラブは、平成 24 年４月１日、クラブ活動を通じて正しい知識と技能を習得し、生命と暮らしを守ることの大切さを学ぶとともに、防災教育を行うことで、家庭や地域の防災意識の高揚を図り、将来の地域防災の担い手となる人材育成を図ることを目的に吉川市内、松伏町内の小学５年生及び６年生の 25 名で発足しました。

平成 24 年度　結成式の様子

3　クラブの活動内容

クラブの活動は原則として月に１回、年間行事に基づいた活動のほか、市や町の催し物などに参加し、火災予防に関する啓発活動などを行っています。

月に１回の活動は、テーマを決めて、消防・救急・救助・予防など多岐にわたる内容となっています。

救急訓練の様子（９月実施　親子で参加）

夏休み期間には、消防署にて１泊の宿泊学習を行い、着衣泳法を学ぶなど、様々な訓練とともに、夜は段ボールなどで寝床を確保するなど、避難所生活を疑似体験することで、団体生活環境下における相互協

可搬ポンプを使用しての専門的な訓練

夜は避難所体験（自分たちで寝床を確保）

救助訓練の様子（いつも以上に真剣!!）

力の重要性について考えるきっかけ作りをしています。

指導者としてクラブ員と接している訳ですが、活動を通じて、クラブ員ひとりひとりに自覚が芽生え、自信を持ち、仲間との絆を深め、チームワークや組織力が高まる様子を段階的に感じ、確かな成長を見ることができることはとてもうれしく、やりがいがあるなと感じます。

4　少年消防クラブ交流会（全国大会）～いざ出陣!!～

平成 28 年 8 月、宮城県において開催された、少年消防クラブ交流会（全国大会）へ参加させていただきました。初めての参加で、緊張もあり、合同訓練の種目であるクラブ対抗リレー、障害物競走では、目標であった優勝には届かなかったものの、事前練習を通じてクラブ員同士の団結を深め、また、全国から集まったクラブ員との交流を深めることができ、最高の思い出と、感謝の気持ちを胸に、そして魅力あふれる東北グルメをお腹いっぱいに帰路につきました。

宮城県での全国大会（緊張しています）

5　クラブのこれから

発足して 5 年目を迎える訳ですが、現在のクラブ員は小学生が 11 名、準指導者である中学生が 12 名、合計 23 名となっています。今後は、活動内容や資機材の充実などを図り、興味、関心を持って取り組める、魅力ある組織づくりを行いクラブ員の確保に努めるとともに、準指導者がクラブ員の育成に携わることのできるような仕組みづくりや準指導者育成プログラムの作成などに取り組んでいきたいと考えています。

最後に、クラブ員には将来の地域防災を支える存在だけではなく、現在の地域防災を担う一人としてのプライドを持ち、ひとりひとりの力は小さくても、仲間と力を合わせて地域を守る気持ちを持って活動に励んでもらえたらと願っています。

千葉県浦安市少年消防団

自分たちのまちは自分たちで守る　～地域の防災リーダー(消防団員)が担い手を育成～

浦安市少年消防団責任者　亀山　友行

1　浦安市の紹介

浦安市は千葉県北西部に位置し、かつての浦安は、三方を海と川に囲まれた「陸の孤島」と呼ばれた漁業の町でした。しかし、昭和46年の漁業権全面放棄を契機に海面埋立事業が進められ、面積が4倍に拡大。それ以降、営団地下鉄東西線や首都高湾岸線、ＪＲ京葉線が開通するなど、都心にわずか十数分という地の利も得て、人口が増加。まちは大きく変ぼうをとげ、今では東京ディズニーランドがあるまちとして有名となっています。

2　浦安市少年消防団

浦安市少年消防団は、現職の平林消防団長が、今後の地域防災の担い手として、少年期から防火・防災に対する知識を得ることにより、将来の地域活動、自治会防災組織のリーダー等、社会生活における地域活動へ参加できる人材育成を検討し、東日本大震災を契機に早急に発足に向け設置検討委員会を立ち上げました。対象を小学5年生、6年生に決定し、市内各小学校、市役所教育担当、防災担当課の協力を経て、平成24年4月1日に第1期生45名により発足しました。「少年消防団」の名称については、消防団員が子供たちの活動を指導し、将来は消防団員を目指してほしいと全消防団員が願いを込め決定しました。

現在は、第4期生（6年生）68名、第5期生（5年生）48名が在籍し、活動を行っています。指導員が考案した様々な訓練、取り組みにより毎回定員を超える応募があり、目標でありました市内全小学校から少年消防団員を卒団させることができました。

3　活動について

当少年消防団の活動は、小学5年生になる4月1日から小学6年生を終了する3月31日までの2年間のカリキュラムにより活動を実施しています。子供たちは「やる時はやる」を合い言葉に、楽しみながら防火防災に関する知識と技術を習得し、指導員は人を思いやり、助け合う気持ちを持つように、指導を行っています。各活動では規律を重視し、すべての活動で規律訓練を実施しています。その成果は消防出初式で発揮され、消防

すべての活動で実施する規律訓練

救助訓練

職員・消防団員と共に入場行進を行い、その堂々とした姿に保護者だけではなく市内外の来賓、来場者からも評価を得ています。また、応急手当について深く身につけてもらうため、自宅において救命を学べるＣＰＲ・ＡＥＤキットを全団員に配布し、活動以外でも保護者と共に学んでいただいています。ＡＥＤを用いた応急手当訓練については市民に披露すると共に、自信を持って行動できよう指導しています。市防災訓練では帰宅困難者訓練に参加し、海上自衛隊の曳船に乗船できるのは当市の様々な団体の中で少年消防団以外は乗船できず、入団時に多くの問い合わせをいただいております。

応急手当訓練の披露

防災訓練で海上自衛隊の曳船に乗船

4　目指せ全国１位（少年消防クラブ交流会）

少年消防クラブ交流会は平成 26 年度から参加しています。初年度は不運にも台風の影

少年消防クラブ交流会

響により中止になりましたが、27 年度には第４位、28 年度は第３位を獲得することができました。２年連続で好成績を収めることができたのは、活動とは別に夏休み期間に実施した自主的な訓練と、仲間の少年消防団員や保護者だけではなく、市長、副市長、教育長が激励に訪れるなど、様々な方の応援の力もあり成し遂げることができました。

5　一緒にまちを守ろう

当少年消防団は、発足して５年となりますが、様々な活動のアイデアと日頃の活発な活動が認められ、平成 27 年度には優良な少年消防クラブとして、消防庁長官賞及び千葉県少年婦人防火委員会長表彰を受賞しました。

指導の手伝いや、出初式等の活動に子供と一緒に参加したいと消防団に入団する保護者もおり消防団員の入団促進にもつながり、地域防災力向上の一翼を担っています。少年消防団員が活動で学んだ知識や経験を大いに活かしていただき、将来は消防団員として共に消防・防災活動ができる日を期待しております。

神奈川県川崎市高津ジュニアハイスクール消防隊

資機材を使い次世代を担う地域の防災リーダーを育成

川崎市消防局　原尻　賢司

1　川崎市高津区

川崎市高津区は、東京都と横浜市に挟まれた細長い川崎市域のほぼ中央に位置し、多摩丘陵の緑と多摩川の水辺など豊かな自然に恵まれた「まち」です。

江戸時代に庶民のブームとなった「大山詣」の宿場町として発展し、その後は江戸に物資を運ぶ大切な輸送路として栄えました。

大山街道における少年消防クラブの行進

2　なりたち

近年、熊本地震などの大地震や北海道・岩手豪雨などによる災害が各地で頻発しており、住民の生命、身体及び財産を災害から守るために、地域の住民による防災力の重要性が増しています。

しかし、区外への通勤者の増加、少子高齢化の進展、さらに、学区等を越えて通学をする学生の増加など、社会経済情勢の変化により地域における防災活動の担い手を十分に確保することが困難となっています。

そのような状況下、学区外に通学する高校生や通勤者とは異なり、平日の昼間帯であっても、地元にいる心強い味方が中学生です。

「体力的に大人と遜色のない中学生を活用することで、貴重な防災資源が確保される」との考えから中学生に対する防災教育を促進しながら、災害時には進んで初期消火活動に協力する「風土づくり」と地元消防団をはじめとする防災コミュニティ等と連携した「防災活動への参加」を意識付け、次世代における「防災リーダー」として育成することで、地域が一体となった防災力の強化を図ることを目的としています。

3　訓練内容

高津ジュニアハイスクール消防隊においては、「事前教養」と「資機材を使用した実践訓練」を柱に実際の活動に即した訓練を実施しています。

＜事前教養＞

・阪神・淡路大震災など過去の災害事例や教訓を理解し、防災の必要性と災害感の養成

・火災を拡大させないことが減災に繋がることの理解を促す

高津区消防出初式におけるジュニアハイスクール消防隊の行進

・消火栓の種類・構造等の基礎知識の習得、町内会に設置されている格納箱の実態を理解を促す

＜器具取扱い訓練＞

・ホースの搬送要領、展張要領、結合要領、筒先の背負う要領等、操法に必要な基本操作要領の習得を図る

＜消火栓操作要領＞

・実際の消火栓を使用して、開閉器による操作方法と注意事項の習得を図る

＜消火器取扱い訓練＞

・消火器の種類、型式、構造、有効範囲の理解を促す

＜消火栓直結操法＞

・５名１組による消火栓に直結して放水する操法実施要領の習得を図る

＜総括＞

・初期消火活動の重要性を認識し、災害時には地域と一体となった活動できるようにし、普段の火災予防についても、率先的に対応できるように協力を求める

4　訓練等の参加

○高津区内の自主防災組織主催の防災訓練や高津消防団の出初式に参加

○今年度は特に少年消防クラブ交流会（全国大会）に参加

高津のクラブ員も他のクラブ員と一緒に交流を図り、特に年下のクラブ員に好かれ、面倒が見られるほどの親交も図れました。

＜第２回全国大会（交流会）に参加してクラブ員の感想＞

・「優勝できなくて悔しかったが、被災地を実際に見て、自分たちにもできることがあると感じた。皆さんに教わったことを忘れず、災害に備えていきたい。」

・「被災地の復興が進んでないので驚いた。」

・「被災地の復興に『役立つ仕事に就きたい』と思った。」

・「私が失敗したが、皆が『お前だけのせいじゃない』と言ってくれた。昼ご飯を食べた後『よし、やってやる』と気持ちを切換え、良い成績が取れた。」

5．あとがき

最後に、訓練を指導していただいた消防団の方からのとても胸にささる、重みのある、お話を聞いたのでご紹介させていただきます。

『あのね、後輩を教えるのはね、ぼくら先輩の役目なんだよ』、

『将来の消防団員を育てるのはね、現役の消防団員の役目なんだよ』、

『それがね、ぼくらの使命でもあるんだよね』と。

敬礼！

40ミリホースを使い、実際の放水演技

高津ジュニアハイスクール消防隊、全員集合！

少年消防クラブ交流会で、他のクラブ員と交流

神奈川県大和市少年消防団

大和市消防本部

神奈川県のほぼ中央に位置する大和市は、人口が23万4千人の自治体です。市域は南北に細長く、縦が9ｋｍ、横が3ｋｍ、面積は約27ｋｍ^{2}と小さな都市ですが、人口密度は横浜市とほぼ同じぐらいあり、県内では川崎市に次いで第2位となっています。

大和市少年消防団は平成5年に、団の活動を支える運営委員会を設立しました。予算面や活動面での支援体制を整え、市内在住の小学校4年生から6年生までの募集を行い、同年の7月11日に発足しました。団員数は、発足の年から毎年40名程度となっていましたが、東日本大震災の発生や設立20周年を契機に団員募集に力を入れたことなどから、団員数は70数名の時期を経て、ここ数年は100名以上を維持しています。今期の第24期生113名が来年3月に卒団すると、卒団数は延べで1,300名を超えることになります。

訓練計画の作成は事業主管課の消防職員が計画をたて、運営委員会総会で承諾を得て、年間25回程度の訓練を行っています。

4月に入団式を行った団員は、礼式訓練、消防署施設見学、消火器の取り扱いや結索訓練といった基本的な技術や知識を身につけることから始まり、社会福祉施設訪問活動といった社会貢献、段ボールを利用して避難所を設営し、宿泊を行う避難所体験訓練や普通救命講習の受講など実践的な訓練を行っています。

また、多くの団員たちが楽しみにしている救助体験訓練では、消防署の協力を得て、訓練の設定や団員への指導を行うこともあり、宿泊研修などでは事業主管課だけでなく、他課の協力を得て、訓練の安全管理に努めており、消防本部全体で団員の育成に対応しています。

設立当初は火災予防に特化して訓練を行ってきた経緯もありますが、近年の災害状況から防災や減災という広い視野から訓練内容の見直し、団員たちの生きる力を育むために訓練内容の向上も継続的に行っています。

団員の訓練指導については、事業主管課の職員が主に行います。しかし、団員は小学4年生から6年生で構成されており、その精神

大和市消防少年団

訓練用備品

的、身体的な差異は様々で、また団員の経験年数による習熟度も様々です。当然、職員だけでは安全管理面や団員の精神的なサポートまで完全に対応するのは困難です。そこで、卒団した中学生から社会人で構成される「指導員」を置き、職員の目が行き届かない訓練面や団員の精神面での指導補助にあたっています。学生や社会人である指導員の参加は強制ではなく、部活動や塾、仕事の合間をぬって参加をし、その献身的な働きによって支えられています。訓練終了後に記入する団員ノートには団員が訓練で楽しかったことや、できなかったことを記入し、指導員が返事を書きます。卒団生だからこそできるアドバイスや励ましなどは団員の精神的な支えとなっています。同時に指導員も訓練ノートを記入し、それに対して職員がアドバイスや活動の考え方などを伝え、指導側の意思の統一を図るようにしています。また、団員の保護者で構成される「活動理事」も様々な活動のサポートを行い、職員、指導員、活動理事と三位一体で団員の訓練指導にあたっています。

表彰については、設立20年を過ぎる頃から消防庁の「特に優良な少年消防クラブ」、

活動を支える指導員

内閣府の「防災功労者・防災担当大臣表彰」など数々の表彰を受けることができました。この受賞は当市における少年期からの防火・防災教育が認められてきたものと解釈し、活動を支えている運営委員会をはじめ、指導員や活動理事の励みとしています。

同時に、受賞を市の広報誌などを通じて、市民の皆様に報告することにより、少年消防団の認知度も高まり、少年消防団員が市民まつりで行う火災予防パレードや大型商業施設で行う火災予防チラシの配布などで更なる効果を上げてきていると感じています。

大和市少年消防団は、小学4年生から6年生で活動を行ってきました。しかし、平成29年度からは近年多発する災害に対応して、より高度で専門的な知識や技術を習得してもらうため中学生も少年消防団員として活動を開始する運びとなりました。多感なこの時期の子どもたちに防災や減災といった知識を伝え、技術を習得してもらうことは、非常に意義のあることであると感じています。卒団後も培った知識や経験を継続して活用し、地域の防災力の担い手となるように願ってやみません。

愛知県豊田市竜神中学校少年消防クラブ

竜神中学校教諭　杉浦　友香

1　はじめに

豊田市は人口約42万人、面積のおよそ7割が森林という緑豊かな場所です。本校は市の南部に位置し、田園風景に囲まれたのどかな地域です。自治区との結びつきが強く、地域で子どもを育む風土があります。

東日本大震災や熊本地震を受け、地域防災力を高める一方で、災害時には避難所運営のお手伝いをするなど、中学生が地域の防災活動の担い手として期待されるようになってきました。

そのため、本校では、避難所運営班との交流、地元の消防署や消防団と協力した避難訓練の実施、少年消防クラブの活動など、防災意識を高め、地域で活躍できる中学生の育成に取り組むようになりました。

2　活動紹介

(1)　学校としての取組

ア　地元の消防署・消防団との合同訓練

毎年4月に、消防署との合同訓練を実施し、災害発生時の初動体制を確認しています。傷病者と搬送者を生徒が演じてトリアージ訓練を実施するなど、災害対応力の向上に努めています。

消防本部との合同訓練（集団救急トリアージ訓練）

(2)　吹奏楽部を活かした防災活動

ア　地域とともに

地域の自主防災会の訓練や交流館が主催する防災イベントに参加し、演奏の発表とボランティア活動を行いました。

中学生の活動に地域の関心も高く、多くの観客の前で、日ごろの練習の成果を発揮できました。吹奏楽部員による防災啓発の発表も行いました。

こうした取組が地元消防団の目に留まり、女性消防団による「防災パネルシアター」の実施、消防団員の指導による各種防災訓練の実施など、消防団との連携を通して実践力の向上に努めています。

また、少年消防クラブ交流会（全国大会）に向けての訓練指導にも消防団の協

地元消防団の式典に参加

地元消防団との交流

市のイベント「交通安全・防災フェスタ」

力を得て、訓練を実施し、更には、大会当日に消防団員の方が現地入りして頂き、競技の指導や熱い応援をしていただきました。

その結果、昨年度の全国２位に続き、今年度全国１位の成績を収めることができました。

イ　地域から市へ発展

「安全・安心フェスタ」など、豊田市主催の防災イベントに参加しました。音楽に合わせて手話や合唱を披露したり、演奏の合間に消火器の使用方法を寸劇で説明したりしました。演出を吹奏楽部員が考え、防災に親しみがもてるよう工夫し、観客にも好評でした。消防団ブースにも参加し、防災パネルシアターを上演するなど、命を守る大切さを伝える活動を行いました。

ウ　中学生から子どもへ

地域主催の防災イベントに継続して参加することで、中学生自身の防災意識や防災対応力が高まり、当たり前に防災活動ができるようになってきました。次第に、教えてもらう活動から、小学生や幼稚園児に教える活動が増えてきました。

3　活動の成果

地域の防災活動や豊田市主催の防災活動に参加することで、中学生の防災意識が高まりました。

市のイベント「防災ステージ」

市のイベント「消防団ブースでボランティア」

その結果、演奏の機会がなくても、ボランティア活動のためだけに、吹奏楽部全員が地域のイベントに参加するなど、社会貢献に対して、高い意識をもつ生徒の育成につながっています。

また、地域とのふれあいや地元消防団との連携を通して、生徒が地域に目を向けるようになりました。将来は消防団員として地域に貢献したいと考える生徒も表れました。

4　今後の展望

吹奏楽部では、今後も地域や市の防災活動に参加し、中学生が地域防災力に貢献できる体制づくりに努めていきたいと思います。

学校では、少年消防クラブの活動に加え、日々の学びの中で身を守る知恵を高めていこうと考えています。

こうした活動を通して、生徒たちが地域の防災に関心をもち、地域の防災活動の担い手として活躍する日が来ることを願っています。

徳島県阿波市土成中学校少年少女消防隊

指導者　鈴田　真二

本校では27名の生徒を選び、活動をしており、将来は地元消防団への入団や地域の消防署に就職するなど、地域防災のリーダーを目指しています。実際に、地域に残り活動している生徒がたくさんいます。

現在の校長もクラブ出身で、積極的に指導をしてくださっています。私も土成中学校で少年少女消防隊に入っていました。

今、指導者は私と同じく本校のクラブ出身の教諭と２人で、地域の消防署や消防団の指導を受けながら活動を続けています。活動方針は生徒の防火・防災意識を高め、規律訓練により機敏な集団行動を可能にし、将来、地域の防火・防災のリーダー、あるいは役立つ人材に育てようということです。主に規律訓練を中心に、屋内消火栓を使って火災想定訓練を行っています。出火場所が理科室や職員室等で、屋内消火栓を使う場所を変えながら行っています。

昭和34年５月に発足し、当時は40名ほどが木造校舎で活動していました。昭和38年には活動の功労を認められ、消防庁長官賞を受賞。また昭和46年にも少年消防隊優秀賞を受賞しています。平成３年３月に救護班を編成し、女子が入ってきたので、少年少女消防隊という名前に変わりました。平成21年には第17回ヨーロッパ青少年消防オリンピックに富丘少年消防クラブと合同で参加し、そのときの功労賞として平成22年３月に、また27年３月にも総務大臣賞を受賞しました。

26年度は８月に西日本の19チームが徳島県に集まり、西日本大会が開かれました。交流会では本校は第２位という成績を収めました。

９月に避難訓練を行い、法被を着て、全校生徒の前で初期消火訓練を披露しました。各消火班に分かれ、屋内消火栓で消火訓練を行っています。

11月には地元の消防署と消防団が土成中学校で阿波市総合防災訓練を行いました。少年少女消防隊を中心に、屋内家屋倒壊救出訓

練、放水訓練、はしご車による救済訓練、救護ヘリによる救出訓練などを行いました。

○成果

土成町消防団として、卒業生たちが活躍できています。阿波市には４町から880名ほどの消防団員がおり、土成町の消防団員は190名ほどですが少年少女消防隊の出身者は８割を占めています。現在、地域の消防署長や阿波市消防団団長も出身者です。初期消火訓練により、屋内消火栓の使い方を全校生徒に知らせることができています。声の連携だけでなく、点呼や手信号、誘導動作の大切さを全校生徒が確認できています。訓練は消防署や消防団と一緒であることが多いので活動内容がよく分かり、本年度も消防署員になってみたいという男子が複数名職場体験にも参加しています。

○課題

少年少女消防隊が57年間の長きにわたり活動をつないでこられたのは、指導に当たってきた本校職員の熱き思いの結実であると思います。今後、継続して指導できる教職員の育成が課題です。

○おわりに

近い将来、高い確率で発生するといわれている南海トラフ巨大地震等様々な災害に対処するために、防災教育の充実が喫緊の課題です。そのためには、ある程度の体力と判断力を有している中学生や高校生が、地域の防災体制に積極的に参加することが不可欠です。本校の少年少女消防隊の活動が、生徒の防火・防災意識を高めるだけでなく、地域防災の担い手としての役割を果たすことができるように、これからも地域との関わりを深めつつ、歴史と伝統のある活動を継続していきたいです。

高知県黒潮町上川口少年消防クラブ

代表者　林　文彦

黒潮町は高知県西部に位置しており太平洋に面しています。人口は約１万２千人、5,600 世帯が暮らしており主な産業は農業や漁業になります。自然の恵みをたっぷりと受け、美しく白い砂浜が４㎞にわたって広がり、観光やサーフィンで訪れる方が沢山います。温暖な気候で住民はとても元気ですが、高齢化はかなり進んでいます。一面に太平洋が広がる黒潮町は鯨の見える町でも有名で、また、日本一の漁獲量を誇る鰹船団もあります。

そんな黒潮町ですが、平成 24 年に南海トラフ地震を想定した最大津波が 34 ｍという国の想定が発表されました。発表直後は、数字に本当に率直に驚きましたし、私の家も海から数十ｍしか離れてないので、恐怖を感じていました。発表直後は 34m に混乱した黒潮町ですが、ぶれない基本的な考え方を策定し情報を精査して問題を細かく分析し、短期、中期、長期的な計画のもと対策を進めています。

黒潮町には、地区として隣り合った上川口少年消防クラブと伊田少年消防クラブという２つの少年消防クラブがあります。いずれも小学校区の子ども会をベースに、平成 23 年１月１日に正式発足しました。ただ、生徒数の減少に伴い今年度から伊田小学校が休校となり、伊田少年消防クラブの子どもたちも上川口小学校に通学しています。

上川口少年消防クラブですが、上川口小学校区の子どもの内４年生～６年生全員がクラブ員で、現在 20 名です。伊田少年消防クラブと一緒の活動も多い状況となっています。

黒潮町の２つのクラブの活動ですが、年間の取組みとして、１月は消防出初め式へ参加し、消防団と一緒に服装点検を受け、隊列行進をして地区の消防団、消防車と一緒に町をまわりながら防火、防災を呼びかけます。また、防災とボランティア週間の活動として、国道を通行中のドライバーを対象に防火、防災の啓発物の配布をしています。７月には消防署１日体験として、はしご車や救急の体験をします。８月には、１泊２日の防災キャンプにより避難所運営体験、防災グッズの製作、12 月は夜警、消防団員と共に火の用心の夜回りをしています。

次に、クラブ以外での防災活動です。先の東日本では「釜石の奇跡」と呼ばれた、子どもたちが自分の命を守り、さらに周囲の命を守った事例があります。子どもたちへの防災教育は重要な対策の１つで、黒潮町内の小

中学校では、“防災知識の教育”を土台として、“命の教育”を実施するため、黒潮町津波防災プログラムの策定を進めています。その中で危険を回避、気づく、他者を思いやる力を身につけ、自分、家族、他者の命に関わることを理解するため学習を深めているところです。また、平成28年度は、上川口小学校での取組みを第２回黒潮町地区防災シンポジウムで地区の取組みと共に発表し、地区防災との連携を図りました。少年消防、小学校での活動は、様々な取組みを保護者の方や地域の皆さんに発表し、みんなで共有していくということが重要だと思います。

黒潮町では、「世界津波の日」が制定されたことを記念し、平成28年11月25日から26日にかけて高校生約360名が世界30ケ国から集う「世界津波の日高校生サミットｉｎ黒潮」が開催されました。サミットでの発表、情報交換により議論した内容はまとめられ、“学びます”“作ります”を柱とした「黒潮宣言」が参加者全員の賛同を受け採択されました。自然の恵みを享受し、時に災害をもたらす自然の二面性を理解しながら、その脅威に臆することなく、自然を愛し、自然と共に生きていくとして結ばれた「黒潮宣言」を胸に刻み、これから私たちは防災に取り組んでいかなければなりません。

最後に短歌を２つご紹介します。

「大津波　来たらば共に死んでやる　今日も息が言う　足萎え吾に」。この句は津波が来ることへの避難の諦めが伺える句です。

もう１つ。「この命　落としはせぬと足萎の　我は行きたり　避難訓練」。一方こちらは避難諦めない命を落とさないという決意がみられます。

黒潮町では避難放棄者を出さないことを重要な目標にしています。町全体で取り組んでいる地震、津波対策で、２つ目の短歌のように避難を諦める声は少しずつ減っています。しかし未だに避難を諦める声があることも事実です。実は２つの短歌を詠んだのは同じ人物で、黒潮町在住の83歳の女性です。１つ目の短歌は、想定発表直後。２つ目の短歌は防災対策を取り組んでいる中で最近詠まれた句です。防災に取り組む中、意識に変化が出て災害を前向きに捉えられるようになりました。83歳の方がこれだけ変われたのです。子どもは尚更意識を素直に持つことでしょう。次世代を担う子どもたちに正しい防災意識を持ってもらう、私たち大人がすべきことはその手助けをすることだと思います。私たちは防災教育を子どもに続けます。子どもは10年経てば大人になり、さらに10年経てば親になります。しっかりした防災意識を持つ親のもとで育つ子どもはしっかりとした防災意識を持っています。防災が当たり前になる文化をつくっていきます。その一端を自分たち少年消防クラブが担っていければと考えています。

福岡県新宮町相島少年消防クラブ

平成 28 年の相島分校ＢＦＣによる、相島地域防災活動年間総括!!

新宮中学校相島分校教諭　白澤　徳教

相島ＢＦＣの年間活動内容報告

４月　夜回り班編制・新１年生入団式・規律訓練

平成 28 年新１年生３名が分校に入学後、北部消防本部消防長、相島区長、相島水上分団長の来賓をお招きし、新入団員の入団式を行いＢＦＣ隊員の意識と使命感を徹底させる目的で毎年の入団式を行っている。

５月　軽可搬ポンプ操法訓練

地元の粕屋北部消防本部の防災課隊員からの指導のもと、ポンプ操法の基礎基本を学び、島内での火災時の初期消火訓練に備えた厳しい訓練を日々重ね火災時の初期消火活動に備えています。

６月　消火訓練・救急救命法講習会

粕屋北部消防本部の救急隊員と相島水上分団隊員を招いて、全島民に参加を呼び掛け、小学校グランドにてＢＦＣ隊員や小学生共々消火訓練を実施し初期消火時の対応訓練を毎年行って準備しています。

また、その後「心臓マッサージ・ＡＥＤ」等の実演講習会を開催し、海難事故や心筋梗塞等の島民に対しての初期対応への訓練を行っています。

８月　粕屋北部消防本部での体験学習

夏季休業中に、相島ＢＦＣ隊員、分校教職員全員で日頃からＢＦＣ活動で様々な指導でお世話になっている消防本部に出向き、防災に関する講義や実演などを体験学習しました。最後にはしご車体験をして一日の体験学習を終えました。

この体験学習を今後の相島防災活動に生かしたいと隊員全員が気持ちを新たにしています。

平成 28 年『内閣総理大臣表彰』受賞

平成 27 年「防災功労者・防災担当大臣表彰」、平成 28 年『内閣総理大臣』２度目の受賞

＊その他にも様々な表彰を受けてきました。

９月　避難訓練・島内運動会時ポンプ操法実演

平成 17 年３月 20 日「福岡県西方沖地震」

での教訓をもとに、毎年９月１日に相島島民の避難訓練を実施することで、防災意識を高める活動をしています。また、日頃から訓練している軽可搬ポンプ操法を「相島区小中合同運動会」で披露し島民や島外者（他地区のＢＦＣ関係者）からの絶大なる賞賛を毎年受けています。

11 月　一斉夜回り「火の用心」活動

島全体の高齢化が進み独居老人世帯が年々増加し火災発生が心配されますので、相島ＢＦＣ隊員が島全体を見回る活動を先輩から後輩へと受け継ぎながら、防災活動に励んで 68 年になります。毎年 11 月には、新しく「火の用心」のステッカーを生徒が作成して全戸に配布し防火呼掛をしています。島民のお守りとして受け継がれる行事です。

＊夜回り活動……１年間を通して週に４日、生徒が、ＰＭ９時より「火の用心―カチカチ」と声だししながら集落を１周し、たき火跡等の火の後始末を確認し、火が燻っている時には消火活動をしながら、全島民への「防火啓発活動」を行っています。

12 月　３年生退団式　：３年間を総括する。

１月　町出初式に参加し、軽可搬ポンプ操法実演

毎年１月恒例の「出初式」に４年前から招待され、町長はじめ町民が見守る中、入場から軽可搬ポンプ操法、入場から退場までの規律正しい演技に会場からの絶大なる賞賛を頂いています。

……相島ＢＦＣ年間努力目標……

『私たちの故郷（相島）は、自分たちの手で守って行きます!!』

最後に、３年間に及ぶＢＦＣ活動を体験することにより、一人ひとりが年々精神的・肉体的に大きく成長し、また、郷土愛も育まれ今後の人生で、困難に直面したとき自分自身の力で乗り越える知識と経験を身に付けられる最善のＢＦＣ活動であることを相島に赴任し多くのことを学び、今後の教育活動に大いに役立つ事を痛感致しました。